

重度知的障害児の要求選択行動における好みの影響

村中智彦

本研究は、重度知的障害児の要求選択行動を生起させるために、どのような選択肢を用意すればよいかについての手がかりを得ることを目的とした。話しことばをもたず、動作による要求表現も乏しい重度知的障害児1名を対象に、2つの遊具を提示して1つを要求選択する場面において、対象児の遊具を見比べる、接近する、従事する反応の観察を行った。対象児の10個の遊具に対する好みの度合いを査定し、5つの提示ペアを設け、どの提示ペアにおいて要求選択反応が生起するのか、提示ペアの相違によって要求選択反応の生起に違いが見られるかの2点について分析を行った。その結果、すべての提示ペアにおいて要求選択反応が認められたこと、提示ペアの相違によって接近する反応と従事する反応の生起に違いが認められたこと、好みの高い遊具を含む提示ペアでは接近する反応と従事する反応の生起が高まることを示唆した。

キー・ワード：重度知的障害児 要求選択行動 好み

I. 問題の所在と研究の目的

先頃文部省より公表された「教育課程基準の改善について」(文部省, 1998)の内容を見ると、児童生徒の主体性を重んじる教育の方針が明確に打ち出されている。近年、障害児教育においても、子ども本人による決定とそれを実現する取り組みの重要性が指摘されるようになった(日本特殊教育学会, 1995; 山田, 1995; 加藤, 1995)。このように、子どもの決定や主体性が重視される背景として、一つには、欧米を中心に活発に行われている障害者の自己決定や選択行動(choice-making)に関する実証的研究があろう(加藤, 1995)。障害者の自律や尊厳を文脈に、選択行動を自己決定を実現する手段と位置づけ、初めて研究にのせたのはMithaug & Hanawalt (1978)であった。以降、欧米では、個人の権利を尊重する社会に支えられ、障害のある当事者の「生活の質」の向上を目的とした選択行動に関する論文が80以上にわたって報告されている(Lancioni et al., 1996)。Shevin & Klein (1984)は、「子どもは、自ら決定を行うことによって、自ら環境を変える体験を得ることができる」と指摘している。学習の主体者である子どもにとっての選択・決定の教育的意義は、この点にあると考えられる。

選択行動研究において主な対象となったのは、重度もしくは最重度の知的障害児(以下、重度児)であっ

た(Lancioni et al., 1996)。知的障害が重いために、言語や動作サインなどのコミュニケーション行動の獲得に困難を示す子どもたちであった。コミュニケーション行動における選択行動は、機能的には、要求言語行動といえる(藤原・大泉, 1993)。ある限られた対象物(選択肢)の中から、1つを選んで要求する行動(以下、要求選択行動)と捉えられる。要求選択行動研究における最も大きな成果は、好み(preference)の存在すら疑わしかった重度児の好みが明確にあり、選ばせるという事態によって引き出せることを明らかにした点であろう(e.g. Persons & Reid, 1990; Sigafos & Dempsy, 1992)。Persons & Reid (1990)は、対象者に2品の食物を繰り返し選んで消費してもらい手続きを用いて、信頼性のある好みの選択が確認できることを示した。望月(1996)は、「与えられた選択肢のどちらかに分化的反応を示す選択は、反応形式から見れば、非常に簡単であり、個人の意思表示の中では最も単純なものである」と指摘している。つまり、選択肢を見る・取るなどの表出の容易な反応によって要求を行うことが可能となる。ただし、見かけ上の選択肢を見る・取る反応が、常に、要求選択であるかどうかには注意する必要があるだろう。藤原・大泉(1993)は、2つの課題物から1つを要求選択させる事態において、対象児が一方の課題物のみを注視しそれを要求した反

応が認められたことを報告している。そして、このような反応は、一方の刺激に統制された反応であり、選択反応とはいえないであろうと示唆している。つまり、真の好みにもとづいた要求選択反応であるためには、対象者が与えられた選択肢のすべてに注意を向けたかどうかという反応を捉える必要があろう。Persons & Reid (1990) の研究をはじめ、重度児の要求選択行動の研究では、この点についてはあまり考慮されていない。

上述のように、要求選択行動は、与えられた選択肢間における個人の「相対的な好み」にもとづいて生起すると考えられている (Shevin & Klein, 1984; Guess et al., 1985)。「相対的な好み」からも分かるように、事物に対する好みには、好みの度合い (preference ranking) が階層的に存在すると考えられる。もちろん、好みの度合いは、事物に対応して異なるであろう。重度児の物品に対する好みの度合いを測る手だてとして、Pace et al. (1985) は、対象者に1つの物品を提示し、対象者の物品に接近する、もしくは従事する反応について観察した結果、それらの反応が好みを測る行動の指標と成り得ることを示唆した。この手続きの妥当性について議論の余地はあるが、選択させる手続きにおいても、選択肢に対する好みの度合いやそれらの組み合わせが、要求選択反応の生起に強く影響を及ぼすのではないかと推測される。好みの他にも、要求選択反応に影響を及ぼす要因として、提示する選択肢の形式 (Persons et al., 1997) や選択肢の提示方法 (槇場・藤田・井上, 1994) が示唆されているが、選択肢の好みの度合いとの関連について検討したものは見あたらなかった。

そこで、本研究では、重度児の要求選択反応の生起と選択肢に対する好みについて検討を行った。重度児に対して、どのような選択肢を用意すれば要求選択反応を生起させることが可能となるかについての手がかりを得ることを目的とした。話しことばをもたず、動作による要求表現も乏しい重度児1名を対象に、対象児の遊具に対する好みの度合いを査定し、査定結果にもとづく提示ペアを5つ設定して、どのような好みの度合いの提示ペアのときに要求選択反応が生起するのか、提示ペアの違いによって要求選択反応の生起状況の違いが見られるかについて分析を行った。

II. 方 法

1. 対 象 児

観察開始時、5歳9ヶ月の男児。保育所に通所して

おり、所での一日の多くは、小集団で構成された障害児保育クラスで活動している。2歳11ヶ月のとき、「自閉的傾向のある知的障害」と診断されているが、対人的相互反応における質的な障害 (APA, 1995) などの自閉症状はそれほど見られない。5歳4ヶ月のとき、本学障害児教育実践センターの教育相談を初めて受け、その後週1回の指導を継続している。主訴は、「ことばの遅れ」「排泄など身辺自立の未確立」であった。

母親は、本児からの働きかけについて、以下のように報告している。「好きなたべものが欲しいとき」や「嫌なことから逃れたいとき」などの要求時に多く見られる。欲しい物を見たり、相手の腕や手を持って連れていく伝え方がほとんどである。本児の要求意図を見逃ごしたり、理解できないことも多い。要求が充足されないと、自分の顎を叩く動作を繰り返したり、声をあげて泣いてしまう。また、大人からの働きかけに対する応答について、簡単な指示かけでも反応が見られなかったり、指示した内容とは異なる行動を取ることが多い。「○○ちゃん」の呼びかけには、ときどき視線が合う。

津守式乳幼児発達検査 (5歳5ヶ月実施) の結果では、運動2歳4ヶ月、探索・操作0歳10ヶ月、社会0歳11ヶ月、生活習慣1歳9ヶ月、言語0歳9ヶ月であった。言語では、「テーブルをまわって欲しい物を取りに行く」「絵本などのページをめくる」の2項目のみ「明らかにできる」項目であった。新版K式発達検査 (5歳6ヶ月実施) では、姿勢・運動2歳11ヶ月、認知・適応0歳11ヶ月、言語・社会0歳7ヶ月であった。認知・適応の「積木」課題では、積木を顎に打ち当てる操作のみであった。「小鈴と瓶」課題では、瓶を振って小鈴を鳴らす操作が繰り返し見られた。

2. 遊具の選定

以下の手続きによって観察に使用する遊具を選定した。

まず、母親に対して、2つのチェックリストを用いて聞き取り調査を行った。食べ物、飲み物、遊び、テレビ番組などの好みの調査と、日常生活における日課や活動の調査を実施した。それらの結果をもとに、以下の条件を満たす遊具を選定した。

- ・日常の遊びのレパートリーにあるもの。
- ・簡単な操作で遊べるもの。
- ・観察場面に導入することが可能であるもの。

そして、「食べ物絵本」「起きあがりこぼし型のアンパンマンの人形 (以下、アンパン人形)」「押すと音が鳴るアンパンマンの人形 (以下、アンパン音)」「鈴」

「新聞紙」「ひも」の6つを選び出した。さらに、幼児が一般的に好むと思われる「触れるとメロディーが流れるくるま(以下、くるま)」「ミニカー」「ベビーブック」「木琴」の4つを付け足して、計10個の遊具を選定した。

3. 好みの査定

選定した10種の遊具に対する好みの度合いを査定するために、以下の観察を行った。観察は、週1回約1時間の教育相談(知覚・認知、コミュニケーションを学習のねらいとした課題学習)の終了後、約15分を利用して行った。使用した部屋(6 m×4 m)の設定を図1に示した。なお、この観察の前に、本児と観察者は、先の部屋において、本児が選定した10種の遊具に自由にアクセスできるセッション(約15分)を3回実施した。

観察の手続きは、Pace et al. (1985)の「単一の刺激を提示し、その刺激に対する対象者の反応を観察する」方法を使用した。まず、図1のように、本児と観察者は机を挟んで対座した。観察者は、本児が観察者を注視したと同時に、あらかじめ遊具箱の中から取り出して身体の後ろに隠しておいた1つの遊具を机上に置いて本児の遊具に対する反応を観察した。1セッションは、選定した10種の遊具を一つずつ提示する10試行からなり、計5セッションを実施した。遊具を提示する順は、セッション毎にランダムに行った。

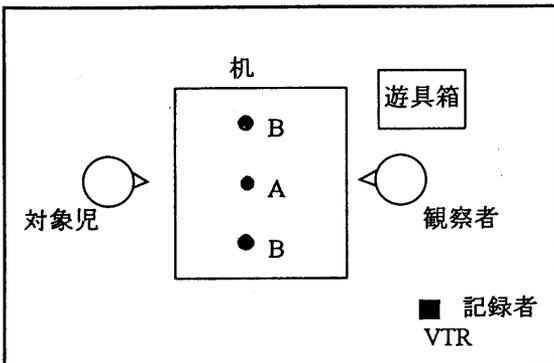


図1 観察場面

- A : 1 遊具の提示位置
- B : 2 遊具の提示位置 (遊具間は40cm)

遊具に対する好みの度合いを測る反応として、Pace et al. (1985)を参照し、接近反応と従事反応の2つの反応を標的とした。接近反応とは、遊具が提示された

後の5秒以内において、遊具に向かう・触れる動作、もしくは積極的な表情や発声が、3秒以上継続して認められる反応と定義した。従事反応とは、接近反応が確認された直後より30秒以上継続して、先に挙げた動作や表情、発声が認められる反応と定義した。

観察者は、本児の接近反応を観察しないとき、提示した遊具をすみやかに取り去り、次の試行に移行した。接近反応を観察したときには、その後遊具に向かう動作等が5秒間中断したときに、遊具を取り去り次の試行に移行した。また、従事反応を認めた後、3分以上経過しても、遊具に向かう・触れる動作等の中断が認められないときには、「ちょーだい」といって手渡しさせた。本児が遊具を持って席を離れても、すぐに席へ連れ戻すことはせず、遊具に向かう動作等の中断を確認した際に席へ誘導した。

観察の結果は、録画テープにもとづき、各遊具とも計5試行における接近反応と従事反応の生起数を記録した。

計5試行における各遊具の接近、従事反応の生起数を図2に示した。図2からも明らかのように、食べ物絵本、鈴、新聞紙、ひも、ベビーブックの5つの遊具では、接近、従事反応が、5試行のすべてにおいて観察された。木琴、アンパン音、アンパン人形、くるまの4つの遊具では、接近はいずれも5回観察されたが、従事は4回もしくは3回であった。ミニカーでは、接近が3回、従事が1回の生起しか観察されなかった。

4. 遊具の提示ペア

図2で示したように、査定結果に基づいて、High-Prefer (HP)、Low-Prefer (LP)、No-Prefer (NP)の3つの好みの度合いを設定した。

選択肢の提示方法は、「2つの選択肢のどちらかを選ぶ」という並列報酬法(高橋・岩本, 1982)を採用した。この方法は、Persons & Reid (1990)、Sigafos & Dempsy (1992)をはじめ、選択行動研究において最も多く使用されている。日常場面でも頻繁に遭遇する提示方法と考えた。この提示方法を用いると、先に設定した3つの好みの度合いから、6つの提示ペアを設定できる。即ち、好みの度合いが同じペアである「HP 遊具 vs HP 遊具」「LP 遊具 vs LP 遊具」「NP 遊具 vs NP 遊具」、また、好みの度合いが異なる「HP 遊具 vs LP 遊具」「HP 遊具 vs NP 遊具」「LP 遊具 vs NP 遊具」である。しかし、図2より、NP遊具はミニカーの1つであったために、「NP 遊具 vs NP 遊具」のペアを取り入れることはできず、それを除いた5つの提示ペアを観察に使用した。

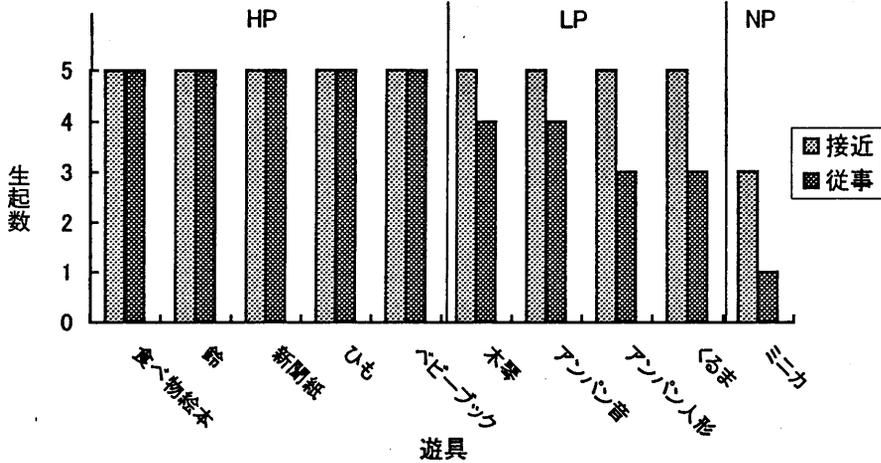


図2 玩具に対する接近・従事反応

5. 観察の手続き

使用した部屋とセッティングは、3. 好みの度合いの査定と同じであった。

図1のように、本児と観察者は机を挟んで対座した。観察者は本児に注目し、本児が観察者を注視したと同時に、あらかじめ遊具箱の中から取り出して身体の後ろに隠しておいた2つの遊具を同時に机上に置き、「どっちにしますか」と言って、2つの遊具に対する本児の反応を観察した。

1セッションは、5つの提示ペアをそれぞれ1回ずつ提示する計5試行を行い、計5セッションを実施した。なお、各提示ペアに使用した遊具の組み合わせは、試行毎に、セッション毎にランダムとし、ミニカーを除いた9種の遊具が、ほぼ同じ提示回数になるようにカウンターバランスを行った。

標的とした本児の反応は、見比べ反応、接近反応、従事反応の3つとした。見比べ反応とは、2つの遊具が机上に置かれた直後から5秒以内もしくは接近反応が見られる直前に、両方の遊具に対して視線もしくは顔を向ける反応と定義した。接近反応とは、2つの遊具が提示された後の5秒以内において、いずれかの遊具に向かう・触れる動作、もしくは積極的な表情や発声が、3秒以上継続して認められる反応と定義した。従事反応とは、接近反応が確認された直後より30秒以上継続して、先に挙げた動作や表情、発声が認められる反応と定義した。

観察者は、本児のいずれかの遊具への接近を認めたとき、もう一方の遊具をすみやかに取り去った。接近反応後、従事反応も確認したとき、本児の遊具へ向か

う・触れる動作等が5秒間中断したときに遊具を取り去り、次の試行に移行した。従事反応を確認し、その後3分以上経過しても遊具との中断が見られないときは、「ちょーだい」といって手渡しさせた。接近反応を確認できないとき、また接近反応を確認し、その後30秒以内に接触の中断が5秒間見られたときも、遊具を取り去り、次の試行に移行した。また、1つの遊具ではなく、机上に置かれた2つの遊具に対して、ほぼ同時に接近反応を認めたときは、いずれの遊具も提示したままにし、いずれの遊具に対しても5秒間の中断を確認したとき、遊具を取り去った。

6. 観察の記録と結果の処理

観察の記録に使用した8ミリビデオカメラは、図1のように配置した。記録者は、遊具を選択する場面では本児の上半身を中心に視線の動きがおさまるように、従事場面では遊具への従事の様子がおさまるように記録を行った。

観察終了後、観察者1名が、録画テープにもとづいて、各試行における見比べ、接近、従事反応の生起を記録した。そして、各提示ごとに、計5試行における見比べ反応が生起した回数、見比べ・接近反応が連鎖して生起した回数、見比べ・接近・従事反応が連鎖して生起した回数を求めた。

III. 結果

各提示ペアにおける「見比べ」「見比べ+接近」「見比べ+接近+従事」の生起数を図3に示した。例えば、「LP vs NP」の提示ペアでは、全試行回数5回のうち、見比べ反応は5回とも観察され、見比べ反応と接近反

応が連鎖して観察されたのは3回、見比べ反応と接近、従事反応が連鎖して観察されたのは2回であったことを表している。

まず、提示ペアごとに、各反応の生起状況について述べる。

図3からも明らかなように、「HP vs HP」の提示ペアでは、全試行とも、見比べ反応後にいずれかの遊具への接近、従事反応が観察された。

「LP vs LP」の提示ペアでは、見比べ反応は全試行とも観察されたが、「見比べ+接近」「見比べ+接近+従事」はいずれも3回であった。これは、見比べ反応が観察された後に、2つの遊具に対して、ほぼ同時に、両手で触れ、その後も2つの遊具に従事し続ける反応が2回認められたからである。

「HP vs LP」の提示ペアでは、「見比べ」「見比べ+接近」「見比べ+接近+従事」のいずれも4回であった。これは、選択肢であるHPとLPの遊具の両者を見比べるのではなく、HPの遊具のみを注視した後に、その遊具へ接近、従事する反応が1回観察されたからである。

「HP vs NP」の提示ペアでは、「見比べ」が5回、「見比べ+接近」「見比べ+接近+従事」が4回であった。これは、見比べ反応が観察された後に、席を離れ窓の方へ向かって外を見る反応が1回観察されたからである。

「LP vs NP」の提示ペアでは、「見比べ」が5回、「見比べ+接近」が3回、「見比べ+接近+従事」が2回であった。5回のうち2回は、先の「LP vs LP」の提示ペアで述べた反応と同様の、2つの遊具に対して両手で触れ、従事し続ける反応が観察された。また、見比べ反応と接近反応が観察された後、30秒以内に遊

具への接触を中断し従事反応が認められない試行が1回あった。

次に、提示ペア間における各反応の生起状況について述べる。

図3からも明らかなように、「見比べ」が生起しなかったのは、「HP vs LP」の1回のみであった。

「見比べ+接近」では、HP遊具を含む「HP vs HP」「HP vs LP」「HP vs NP」の3つの提示ペアにおいて、HPの遊具を含まない「LP vs LP」「LP vs NP」の2つのペアよりも、生起数の多い傾向にある。

「見比べ+接近+従事」においても、HP遊具を含む提示ペアでは、HP遊具を含まない提示ペアよりも、生起数は多い傾向にあった。また、NP遊具を含む「LP vs NP」の提示ペアでは、5つの提示ペアにおいて最も生起数が少ない。

好みの度合いが同じである「HP vs HP」「LP vs LP」のペアと、好みの度合いが異なる「HP vs LP」「HP vs NP」「LP vs NP」のペア間における生起状況を比較すると、両者に目立った傾向は見いだせなかった。

IV. 考 察

いずれの提示ペアにおいても、2つの遊具を見比べる反応とそれに連鎖して遊具に接近する反応が3回以上観察された。この結果より、いずれの提示ペアにおいても、要求選択反応が生起したと見なしてよいであろう。また、見比べ反応の生起は、いずれの提示ペアにおいても、5回もしくは4回という高い確率で観察された。つまり、提示ペアの相違は、要求選択反応、中でも見比べる反応の生起そのものを妨げることはなかったといえる。

しかしながら、接近、従事反応の生起状況において

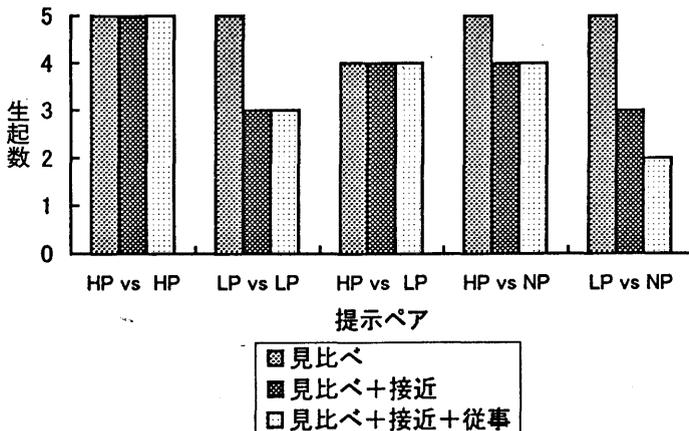


図3 見比べ・接近・従事反応の結果

は、以下の傾向が指摘できる。好みの高い遊具を含む提示ペアでは、それを含まない提示ペアよりも、接近、従事反応の生起数が多い傾向にあった。また、好みでない遊具を含む提示ペアでは、従事反応の生起数が最も少なかった。これらの結果から、提示ペアの相違は選択肢に接近する、従事する反応に影響を及ぼしたと考えられる。先行研究によって、対象者が課題や活動を選択できる事態の方が、それらを選択できない事態よりも、課題や活動に従事する生起率を高めると報告されている (e.g. Dattilo & Rusch, 1985 ; Fisher et al., 1992 ; Bambara et al., 1995)。さらに、選択できる事態が課題や活動の従事率を高める理由について、Fisher et al. (1992) は、選択できる事態によって対象者のより好みの高いものに従事できる確率が高まるためと指摘している。この指摘にもとづくと、好みの高い遊具を含む提示ペアでは、好みのより高い遊具に接近する、従事する反応が可能であったために、接近、従事反応の生起する確率が高まったのではないかと推測される。好みの高い遊具を含まない「LP vs LP」「LP vs NP」の提示ペアにおいて、1つの遊具を選択することを迷うように、2つの遊具に触れる反応が観察されたことも、先に述べた推測を支持するものと考えられる。

本研究で以上の点を裏付けるには、各提示ペアの試行回数そのものが少なく、提示ペア間における反応生起数の差が有意な差といえるだけのデータは不足しており、これ以上の議論は今後を待たねばならない。

また、今後の課題として、Dyer (1987) は「好みは変化する」と指摘しており、本研究で設定した本児の遊具に対する好みの度合いが、観察期間を通して維持されていたかどうかを再査定する手続きが必要であったろう。

引用文献

- American Psychiatric Association (1994) Quick Reference to the Diagnostic criteria. 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳 (1995) DSM-IV精神疾患の分類と診断の手引き. 医学出版.
- Bambara, L. M., Koger, F., Katzer, T. & Davenport, T. A. (1995) Embedding choice in the context of daily routines: An experimental case study. *Journal of the Association for People with Severe Handicaps*, 20, 185-195.
- Dattilo, L., & Rusch, F. R. (1985) Effects of choice on leisure participation for persons with severe

handicaps. *Journal of the Association for People with Severe Handicaps*, 10, 194-199.

Dyer, K. (1989) The effects of preference on spontaneous verbal requests in individuals with autism. *Journal of the Association for persons with Severe Handicaps*, 14, 184-189.

Fisher, W., Piazza, C. C., Bowman, L. G., Hagopian, L. P., Owens, J. C., & Slevin, I. (1992) A comparison of two approaches for identifying reinforcers for persons with severe and profound disabilities. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 25, 491-498.

藤原義博・大泉優美子 (1993) ことばのない精神遅滞児の個別学習課題における要求選択行動の形成. *上越教育大学研究紀要*, 12, 225-240.

Guess, D., Benson, H. A. and Siegal, C. (1985) Concepts and issues related to choice-making and autonomy among persons with severe disabilities. *Journal of the Association for People with Severe Handicaps*, 10, 79-86.

加藤哲文 (1995) 学校教育現場における選択行動形成の意義: 山田論文へのコメント. *行動分析学研究*, 8, 22-25.

Lancioni, G. E., O'Reilly, M. F., & Emeson, E. (1996) A review of choice research with people with severe and profound developmental disabilities. *Research in Developmental Disabilities*, 17, 391-411.

槇場政春・藤田継道・井上雅彦 (1994) 最重度知的障害児における選択行動の形成に関する基礎研究 (1). *日本特殊教育学会第32回大会発表論文集*, 470-471.

Mithaug, D. E., & Hanawalt, D. A. (1978) The validation of procedures to assess prevocational task preferences in retarded adults. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 11, 153-162.

文部省 (1998) 幼稚園, 小学校, 高等学校, 盲学校, 聾学校及び養護学校の教育課程改善の基準について (審議のまとめ).

望月昭 (1996) 発達障害リハビリテーションの実践・研究について: 自己決定の援助技術を中心に. *発達障害研究*, 17, 39-42.

日本特殊教育学会 (1995) 知的障害者の「自己決定」を考える. *日本特殊教育学会第33回大会論文集*,

- 121-124.
- Pace, G. M., Ivancic, M. T., Edwards, G. L., Iwata, B. A., Page, T. J. (1985) Assessment of stimulus preference and reinforcer value with profoundly retarded individuals. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 18, 249-255.
- Parsons, M. B. & Reid, D. H. (1990) Assessing food preferences among persons with profound mental retardation : Providing opportunities to make choices. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 23, 183-195.
- Parsons, M. B., Harper, V. N., Jenson, J. M. and Reid, D. H. (1997) Assisting older adults with severe disabilities in expressing leisure preferences : A protocol for determining choice-making skills. *Research in Developmental Disabilities*, 18, 113-126.
- Shevin, M. & Klein, N. K. (1984) The importance of choice-making skills for student with severe disabilities. *Journal of the Association for People with Severe Handicaps*, 9, 159-166.
- Sigafoos, J. & Dempsy, R. (1992) Assessing choice making among children with multiple disabilities. *Journal of Applied Behavior Analysis*. 25, 747-755.
- 高橋雅治・岩本隆茂 (1982) 選択行動の研究における最近の動向 I : その基礎的成果と問題点. *心理学評論*, 25, 192-230.
- 山田岩男 (1995) 養護学校における自発的選択要求行動の形成. *行動分析学研究*, 8, 12-21.

謝 辞

本学大学院生の石月将子氏, 赤羽博英氏には, 観察記録や指導補助など, 多大の協力を得た。記して感謝する。